

音訳語における口偏の機能について ——口偏蔑視表示説の検討

田野村忠温

要旨：中国語の音訳語に加えられた口偏は当該の語の表す人や事物に対する書き手の蔑視を表すとする見方があり、関連の研究中に繰り返し現れる。しかし、そのような説は狭い範囲の観察に基づく短絡的な判断の結果である。音訳語の口偏の機能は、一般に考えられてきた通り、当の漢字が音訳に使われている——すなわち、発音だけを表し、意味を表さない——ことを示すことにのみある。

キーワード：音訳語 音訳字 口偏 蔑視

1 はじめに

音訳語に使われる漢字、すなわち、音訳字に対する口偏の付加の現象がある。「咖啡」や「咖喱」は「加非」「加厘」の各字に口偏を加えたものであり、「啤酒」の「啤」は「卑」に口偏を加えたものである。過去においては外国の地名や人名にも広く口偏が使われ、「英吉利」を「啖咭喇」と書いたりすることが行われた。

そのような口偏の使用の目的は、当の字が音訳字であること、すなわち、もっぱら発音を表し、意味を表さないことを示すことにあり、また、基本的にそれに尽きると考えられる。そして、実際それがあらためて述べるまでもない一般的な見方であると思われる。

ところが、それとは異なるものとして、口偏は当該の音訳語の表す人や事物に対する書き手の蔑視、軽蔑を表すとする見解がある。そして、それが関連の研究中に繰り返し現れる。しかし、筆者の見るところでは、そのような説においては例外なく狭い範囲の観察に基づいて短絡的な判断が下されている。この小論では、口偏蔑視表示説が妥当性を欠く考えであることを述べる。

以後、漢字は原則として現代日本語の字体による。ただし、中国語で書かれた現代の先行研究からの引用においては原文の字体に従う。

2 口偏による音訳の表示

口偏は古来サンスクリット語や西夏語の注音において r 音や有声子音を示すのに使われていた(孫(2010, 2020))。そして、それが外来語、とりわけ地名と人名の音訳においても使われるよ

うになった(李(2017))。

2種類の用途は、ともに発音に関わるという点で共通するが、本質的に異なる。前者は、通常の漢字では表せない外国語の特定の種類の発音に特別な表記を与えることによって、注音を精密なものにすることを目的としている。国際音声記号(IPA)で言えば補助記号のようなものである。

それに対して後者は、中国語の発音で読まれる外来語を文章中でそれとして示すためのものである。発音の種類に関する限定はない。中国語で音訳語を通常の漢字で書けば文章に埋もれ、他との区別が付きにくくなる。そこで外来語を明示する方法の1つとして口偏を付加するということだと考えられる——ほかに、外来語に傍線を施すなどの方法もある——。

19世紀には口偏はもっぱら外来語の音訳に使われるようになった。19世紀中葉に英国商人ロバート・トーム(Robert Thom、中国名羅伯聃)によって執筆、出版された英語入門書『華英通用雑話』上巻(1843(道光23)年)——英語の書名は *Chinese and English Vocabulary, Part First* ——における英語の注音に、口偏の有無によってlとrを区別しようとしている形跡を読み取ることができるが——例えば、lightを「来的」、rightを「唻的」と注音するなど——、古い伝統の終末的な残存に過ぎない(拙論(2019))。

音訳語の口偏が音訳を示すものだという考えは、早くは英国人宣教師ロバート・モリソン(Robert Morrison、馬礼遜)の英華辞典 *A Dictionary of the Chinese Language, Part III, English and Chinese* (1822(道光2)年)に見られる。中国語に添えられた発音の表示は省いて引用する。

ENGLISH nation, 英吉利国. Chinese commonly put a 口, or *mouth* at the side of each character to denote that the words are only used for sound; but it is an unnecessary addition. (中国人¹はよく当の語が発音だけを表すことを示すのに各字の横に「口」を加える。しかし、それはなくてもよい付け足しである。)

「口」が“なくてもよい付け足し”だという説明はこの項目の文脈において、言うまでもなく、「英吉利」は「啖咭喇」とも書かれるがそのように書く必要は特にないということの意味する。

米国人宣教師サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ(Samuel Wells Williams、衛三畏)も中国語学習書 *Easy Lessons in Chinese, Or Progressive Exercises to Facilitate the Study of That Language, Especially Adapted to the Canton Dialect* 『拾級大成』(1842(道光22)年)の第1章“Of the radicals”(部首について)で口偏の働きの1つを次のように説明している。

This radical is placed on the side of characters to denote that their sound merely is to be taken, irrespective of their signification, as when writing the sounds of a word from another language,

¹ 引用中の Chinese に定冠詞がなく、中国語を表しているように見えるが、続く動詞が複数形の put であり、意味的に見ても Chinese は中国人を表しているものと考えられる。

euphonic particles, &c. (この部首は漢字の横に置かれ、その意味には関わらず発音だけが使われることを示す。例えば、外国語の語の発音や語気助詞を書くときに使われる。)

ウィリアムズは華英辞典 *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect* 『英華分韻撮要』(1856 (咸豊 6) 年) の巻頭の Introduction、および、同じく華英辞典 *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language* 『漢英韻府』(1874 (同治 13) 年) の「口」の項目においても、口偏について同様の説明を述べている。

中国人による著作における類似の記述は、葛編(1940)巻頭の翁之灝^{おうしこう}による序に見られるのが筆者の確認することのできた最初の例である。引用者による下線と紛れるのを防ぐために、原文の傍線は加点に変えて示す。

揆之東西交接之始，輾轉紹介，已頗費苦心，例如中俄初會，曾稱彼邦爲鄂羅斯，瀛海初通，例以口旁示音譯，故有啞喞喇之稱。(東西交流の開始期には外国地名の翻訳に随分苦心したと考えられる。例えば中国はロシアとの最初の接触において先方を「鄂羅斯」と呼んだ。西洋との貿易が始まって以後は、口偏を使って音訳を示すことが通例となり、「啞喞喇」という名称が生まれた。)

同年の山田 (1940) も次のように述べている。²

この仮借は、上の類の外、外国語の音訳に多く用ゐる。かゝる時にはこれが音訳なる由を明かにしておく為に口偏を加へて示すことあり。

喇叭 (刺八は音訳) 咖啡 (加非は音訳) 啞喞喇 (後には口偏を除きて英吉利とす) かくの如きは、上にいへる形声と頗る似たる点あり。されど、形声は各字それぞれ特有の意義あるに、これらの文字は皆たゞ音のみにして義字にあらねば、性質を異にするものなり。

口偏が音訳を示すためのものだという考えはその後さまざまな議論の文脈で述べられてきた。これが 19 世紀の入華宣教師から現在の学術研究者に至る多くの人々によって共有されてきた理解であると言ってよいであろう。上に引用したいずれの例においても、著者の独自の主張ではなく疑問の余地のない事実を述べているという印象の書きぶりである。

² 同書は日本語の漢語を主題とした論考であるが、挙げられた 3 例がいずれも中国語からの借用による音訳表記であり、事実上中国語の口偏に関する説明になっている。

なお、山田より早く伊能(1928)が台湾の言語に関する記述において次のように述べている。

之を写すに漢字を以てせんとするに方り、多くは蓋然類似の近音を有する文字を宛て、該字に口偏を添加して、単に口語を擬訳するの意を表示するもの多し。Turokok の平埔番社名を写すに、哆囉咽の字形を以てし、寒を意味する Mahara といへる語詞を写すに、嗎哈喇の字形を以てする如き、其的例なり、俱に台湾に於ける人文特発の一面を示せり。

3 口偏の機能に関する異説

ところが、音訳語に加えられた口偏の機能に関してそれとは区別される2、3種類の見方がある。本小論で検討の対象とするのは、口偏が中国人の外国に対する蔑視を表しているという考え(3.1)であるが、それ以外のものも併せて確かめる。

3.1 口偏蔑視表示説

音訳語の口偏が蔑視を表すとする見方は従来繰り返し述べられてきた。その事例は多いが、広く読まれ、大きな影響力を持つと思われるものをいくつか選んで発表時間の順に示せば以下の通りである。これらの論述の妥当性は後にまとめて検討する(4節)。

正確に言えば、口偏蔑視表示説には、口偏が音訳を示すという理解を前提にそれが蔑視を表すと述べるものと、音訳には触れずただ口偏が蔑視を表すと言うだけのものがある。しかし、論述の簡潔のために両方を一括して扱う。

周(1998):

汉字中以口为偏旁的字本已不少，清代中期以来，更是大有增加，这种情况的发生是与西力东渐密切相关的。中国人向来以天朝大国自居，不但以周边国家为外夷，即看西洋人亦是犬羊之性，满怀鄙视之意，所以将西洋的地名、人名的中文译音都加上口字偏旁，以示其不屑。

(口偏の付いた漢字は元来多いが、清代中期以後さらに大幅に増えた。これは西洋の勢力のアジアへの拡張と密接に関係している。自国を世界の中心と考えてきた中国人は、周辺国を外夷と見なすだけでなく、西洋人をも“犬羊”の性質の民族としてさげすみ、西洋の地名や人名の音訳に口偏を加えて軽蔑を表した。)

焦(2000):

汉字中没有比英、美、吉、利、坚、法、兰、荷、德、意、大、瑞更好的字眼了，我们在翻译 English、America、France、Holland、Italy、Swiss 时将这最美好的字眼奉送给英美诸国，从这些国家的译名中可以窥见我们民族的某些心理信息。英吉利三字在鸦片战争的条约中都带口字旁。汉语译外词时，加口旁表示与叽里呱啦语言不通的异族有关。在华夏文明之初，那是加虫旁加犬旁的。选择英吉利作声旁，加口字旁造出新的形声字，足见一种心理规格待遇。最后省去口旁，径作英吉利，就等于顶礼膜拜馨香而祝了。(漢字のうちに「英、美、吉、利、堅、法、蘭、荷、德、意、大、瑞」ほどよい字はない。我々が English、America、France、Holland、Italy、Swiss を翻訳するときには欧米諸国のためにそれらのよい字を選んで使っている。そうした国名の音訳に我が民族の一種の心理を窺うことができる。しかし、「英吉利」の3字はアヘン戦争の条約では口偏が加えられている。外国語の音訳に口偏を加えるのはペラペラしゃべるが話の通じない異民族ということと関係している。中華文明の初期においては、虫偏や獣偏が加えられた。「英吉利」の各字に口偏を加えて新しい字を作っているのは、明らかに一種の心理的な待遇レベルを示している。最終的に口偏を省いて「英吉利」に変えたのは、英国に対する敬意、礼儀を示して美しい音訳にしたということである。)

馮 (2004) :

嘉道时期音译西洋各国国名,多在字前加“口旁”,如英国为“^(マ)英咭喇国”、美国为“^(ア)咭哩干国”,以示轻蔑。(嘉慶、道光期には西洋の国名を音訳する際には字に口偏を加えることが多く行われた。例えば、英国は「啖咭喇」、米国は「咭哩干国」と書き、それによって軽蔑を示した。) ³

鄒 (2007) :

19 世纪 30 至 40 年代,有关英国的著述不断地增多,代表性的文章有 1832 年萧令裕的《英吉利记》;约 1834 年有叶钟进的《英吉利国夷情略》上下篇;1834 年有汤彝的《英吉利兵船记》;1841 年有陈逢衡的《英吉利纪略》;1844 年有汪文泰的《红毛番英吉利考略》等,这些早期的读本在“英吉利”三字上都有口字旁,以表示对于英国红毛番鬼的鄙视。(1830~1840 年代には英国に関係した著述が増え続けた。それらの早期の著述では「英吉利」の 3 字に口偏が加えられ、英国の“紅毛番鬼”に対する蔑視を示している。)

方 (2012) :

其时,在将英语翻译成汉语的过程中,如果需要给外国人命名时,人们常常使用甚至是发明一些伴有“口”字偏旁的字词。根据通常的观点,这里的“口”指的是动物的而不是人的嘴巴。在这样一种造词结构下,它很明显地涵括了人们所流露或暗示的印象,其特定的情感价值,其能够诱导某种气氛或情绪的因素,其包含着的某种意志的态度,以及部分的关联评价。

(19 世紀中葉当時、英語を中国語に翻訳する際に外国人に名を与える必要があれば、人々はしばしば口偏を持つ名前を使い、また、自ら新たに作り出すことさえ行った。通常の見方によれば、この口偏は人間ではなく動物の口を指す。このような造語法において、明らかに口偏は人々が表現ないし暗示する印象やその感情的価値を含み持っている。)

口偏蔑視表示説はより早く日本人による著述中にも見出される。

白川 (1978) :

イギリスはかつて「英吉利」とかいたが、はじめは「啖咭喇」と口をそえたものである。乾隆五十八(一七九三)年、英国の正使としてマカトニー卿が清朝に朝賀に赴いたとき、典礼問題が紛糾し、三跪九叩の礼を行なうことでようやく謁見を許されたが、そのときの上諭中にしるされているのがこの「啖咭喇」であり、マカトニーも「馬戛爾尼」の四字にみな口をつけている。中国の伝統的観念によれば、四夷は中華に対してみな狄・蛮のように獣畜をもってよぶ例であるから、「英吉利」にも狗の略符として口をつけたのであった。

³ 「咭哩干国」の「咭」は「羊」に口偏を加えて音訳であることを示したのではない。羊の鳴き声を表し、広東語では me (声調は第 1 声) と読まれる字である。したがって、「咭哩干国」は馮の論述にとってあまりよい例ではない。

あて字を使うにも、中華的伝統と原則に厳重に従うべしとするのが、皇帝の考えであった。

衛藤 (1982, 1984) :

清朝の制度の中では、建前としては、イギリス、フランス、オランダ等々清朝と貿易する諸国はことごとく朝貢国であり、それぞれ啖、嘸、嚙等々の字で示された。口偏はいうまでもなく文明の外にあるという含蓄をもった卑しめる表現である。 (衛藤(1982))

当時の清朝公文書を見るとヨーロッパ諸国は、英、仏、蘭等すべて啖、嘸、嚙と書かれている。中国では口は汚ないものであり、口偏をつけることは一段相手を貶しめることになる。 (衛藤(1984))

以上はすべて現代における論述であるが、口偏蔑視表示説の最も早い事例と解釈できるものが19世紀の文献中に見出される。それは、魏源『聖武記』(1842(道光22)年)の巻十二「武事余記 掌故考証」における次のくだりである(拙論(2021))。

乾隆四十年五月諭曰，“朕每見法司爰書，以犯名書作惡劣字，輒令更改，而前此書回部者每加犬作狇，亦令刪去犬旁。此等無関褒貶，適形鄙陋，豈同文之世所宜有。”(中略) 西藏之刺麻、西洋之英吉利皆不加口旁。他書皆作喇嘛、啖咕喇，字書所無。(乾隆40年5月の勅諭に、“罪人の供述書にその名が劣悪な字で書いてあれば必ず改めさせる。以前に回族の「回」にことごとく獸偏を加えて「狇」と書いてあったときは獸偏を削らせた。それは他者をよく扱うとか悪く扱うといったこととは関係がない。単に書き方が品位を欠くということであり、同文の世にそのようなことがあってはならない。”とある。(中略)私はチベットの「刺麻」にも西洋の「英吉利」にも口偏を加えない。他書は皆「喇嘛」「啖咕喇」と書くが、そのような字は字書にない。)

ここで魏源は、乾隆帝の“この平等の世にあつて公文書の人名や地名は実際の通りに記さねばならない、罪人の名を悪い意味の字で書いたり、異民族に関わる記述で字に獸偏を加えたりしてはならない”という趣旨の勅諭⁴を引用し、自分は音訳語に口偏を加えないという表記の方針を表明している。引用において中略した箇所には、人名などに実際の語形や表記を使わなかった種々の事例が批判の対象として挙げられている。

魏源は口偏の付加が蔑視を表すとは明言していないが、文脈上素直に読めば獸偏の付加と同様のものと見なしていると言える。とすれば、魏源は記述の公正の観点から口偏を使うべきでないと判断したことになる。しかし、獸偏が蔑視を表すという考えと、口偏が蔑視を表すという考えのあいだには大きな隔りがある。前者には異論の余地がないであろうが、後者は根拠がまったく不明である。

⁴ 原文は『大清高宗純皇帝実録』(大満洲帝国国務院)巻之九百八十三に収められている。

現代の口偏蔑視表示説には、『聖武記』における魏源の記述に判断を誘導されていると見られるものもある。例えば、馮(2004)は現に先に引用したくだりに続けて、次のように魏源による音訳に触れている。

而《海国图志》则去“口”旁，译作“英吉利”、“弥利坚”，表现出对外域的理性态度。(しかし、『海国図志』は「喫咭喇」などの音訳から口偏を取り除いて「英吉利」「弥利堅」とし、外国に対する理性的な態度を示した。)

しかし、口偏のない字形で書くことがなぜ“外国に対する理性的な態度”を示すことになるのか。魏源の判断が正しいとの前提で考えればそのような評価になるとしても、その前提自体に問題がある。⁵

3.2 口に関わることの表示

音訳語における口偏の使用については、蔑視を表すという見方のほかに、当の事物が口に関わるものであることを示すという見方もある。

許(1992)は、「咖啡」という音訳語に口偏が使われるのは、コーヒーが口で飲むものであるからだと言う。

有一些音译词，依据汉字偏旁表形的功能，取得文字形式上的汉化，逐渐为汉语所吸收。比如前边举到过的“咖啡”，都加“口”旁，表明是一种食物；“目宿”改为“苜蓿”，表明是一种植物。(一部の音訳語は、漢字の偏や旁の使用によって字形上中国化し、徐々に中国語として吸収された。例えば、「咖啡」は各字に口偏を加えることでそれが食物の一種であることを示し、「目宿」に草冠を加えて「苜蓿」⁶とすることでそれが植物の一種であることを示している。)

⁵ 魏源の執筆態度には一見不可解な要素がある。例えば、『海国図志』の「英吉利国広述下 原無今補」——50巻本と60巻本では巻三十五、100巻本では巻五十三——において魏源は「紅毛」「英吉利夷官」「英吉利番船」などの表現を使っている。魏源の書き方は必ずしも公正だとも言えないのである。

『聖武記』の記述に基づいて筆者の考えるところによれば、魏源による各種名称の表記法の背後には少なくとも2つの思考が混在している。すなわち、①悪意を込めた表記を使わない、②特殊な漢字——“字書にない字”——を使わない、の2つである。(実際には、ほかに俗称の類を使わないという考えもあり、本文での引用で略した部分に例が示されている。)⁶「紅毛」などの例においては②の考えは生きているが、①は無視されている。「喫咭喇」などを使わないと魏源が言うのは②に違反するからであり、①との関係は不透明である。私見によれば、馮(2004)を含む従来の研究における魏源の理解は単純に過ぎた。正確な理解のためには、『聖武記』の混線した記述を適切に解釈し、①と②を区別して考える必要がある。

⁶ ウマゴヤシ。マメ科の植物。「苜蓿」は古来使われており、それを音訳語だとする許の記述の妥当性は不明である。

しかし、口偏は飲食物の名称だけでなく、「喇嘛」(ラマ、チベット仏教の高僧)「呷叭」(カーキ色)「吨」(トン、重量単位)などや化学物質名の音訳にも使われる。過去には外国の地名や人名の音訳にも広く使われた。したがって、飲食関係の名称のことだけを考えて口偏の機能を知ることにはできない。

後藤(1935, 1938)は、次のように「喧嘩」に口偏が付いているのは中国のけんかが口であるものだからだと説明している。ここでの考察の主題を外れるものであるが、一見関係しているようにも見えるので混同を防ぐために触れておく。後藤の話に問題があるということではない。

支那の喧嘩は日本のそれの如くすぐいきなり手を出し足で蹴ると云ふのではない。字面にも見えてゐる通り口偏がついてゐる。口偏のついてゐると云ふわけはその実あちらの喧嘩は口である喧嘩であることを物語れるものである。 (後藤(1935))

何にしてもその喧嘩は唯、口の上、言葉ばかりの争ひである。そこで昔しから支那の喧嘩はその文字にも見えてゐる通り口偏がついてゐる。決して手偏や足偏はついてゐないのである。何より文字が最も正直に之を表示してゐると云へるのである。 (後藤(1938))

これはそもそも音訳語への口偏の付加の問題ではない。すなわち、「喧嘩」は「宣華」と書かれ、けんかを表す語が先にあつてそれに口偏を加えたものではない。「喧嘩」の口偏は、「喧嘩」という語以前、すなわち、「喧」「嘩」という漢字の成立の問題である。同様に口偏を持ち、口に関わる意味を表す漢字はほかにも多い——「喉」「嘴」「喫」「吸」「鳴」など——。通常の漢字を構成するそうした本来的な口偏と音訳語における口偏は区別して考える必要がある。⁷

3.3 口偏は「国」の略字

ほかに、これは単なる伝聞の形での記述であるが、宮崎(1971)には口偏は国を表すという考えが述べられている。

噶喇叭はジャワ島ジャカルタのことで、土語カリッパの音訳。外国の名に口偏をつけるのは口でなく、国の略字だと言う。

口偏を国構えと見るという聞き慣れない話であるが、いずれにせよ口偏は国名だけでなく人

⁷ 正確を期して言えば、本来的な口偏と音訳を表す口偏という区別には再考の余地がある。例えば、「嗎」「呢」「啊」のような語気助詞や「咚咚」(どんどん)「噤噤嘎嘎」(がやがや)のような擬声語は外国語を音訳したものではないが、その口偏は性質上音訳の口偏に共通している。傍の「馬」や「冬」などがその意味を表していないからである。ウィリアムズが『拾級大成』で外来語の音訳と語気助詞における口偏を同種のものとして見なしている(2節)のは正しい理解だと言える。ただ、実際にはさらに細かい議論が必要であり、口偏の分類の問題については以上の言及にとどめる。

名や各種の事物の名称の音訳にも使われるので、この考えも口偏の機能に関する説明にはなり得ない。

4 口偏蔑視表示説の問題点

さて、音訳語に加えられた口偏が蔑視を表すという見方について筆者の考えるところをまず手短かに言えば、有効な論証を欠き、狭い範囲の観察と不十分な思考に基づく短絡的な推論にとどまっているということである。以下において、そのことを具体的に述べる。

4.1 論証の欠如

何よりも重要なのは、音訳における口偏が蔑視を表すという主張の正当性が説得力のある形で示されたことが従来一度としてないということである。証拠を挙げることなくただそのように述べているか、もしくは、それが正しいことを前提として牽強附会の説明を与えようとしているかのいずれかである。無理な説明がなされるのは、根拠を示さなければ読者の理解が得られにくい説だという著者の自覚の反映であろう。先に見た口偏が音訳を示すという記述においてはいずれの著者もその根拠を示す必要を感じていなかった(2節)のと対照的である。

周(1998)は、先に引用したくだりの後続文脈において、“口偏が軽蔑を表すのは、「口」の字が下賤の意を含み持つ場合があるからだ”と説明し、俘虜を表す「生口」、奴隷を表す「女口」、家畜を表す「牲口」「頭口」をその例として挙げている。しかし、そうした複合語の存在に基づいて口偏の意味、機能を判断することは無理であろう。

焦(2000)は、“口偏の付加は、古く異民族の言語の記録において漢字に「虫」や「犬」を偏として加えた例があるのと共通の心理による”とする。しかし、すでに魏源の『聖武記』のところで述べたように、口偏の付加の目的を虫偏や獸偏の付加のそれと共通のものを見なすことの妥当性が疑わしい。

方(2012)は“口偏は動物の口を表す”、白川(1978)は“口偏は狗の略符である”、衛藤(1984)は“中国では口は汚いものである”と述べ、そのために口偏が蔑視を表すのだと言う。いずれも信頼性に乏しい断定である。これらもやはり、口偏が蔑視を表すとする未検証の命題から出発し、それを正当化するために理由を考え出したということであろう。口偏を狗の略符とする白川の説明については、より早く陳舜臣も武田(1971)として出版された対談において「啖咭喇」には「ケモノを表す口偏」が付けられていると発言している。

游(2014)は、口偏が蔑視を表すという見方の証拠として、中山大学歴史系・中国近代現代教研組研究室編(1963)にまとめて収められた林則徐の文書において「奸夷」(悪しき外国人、英国のアヘン商人)の名の多くに口偏が付けられていること、また、「啖咭喇」という名が「屁」の字を使って「啖咭喇」とも書かれていることを述べている。しかし、同書に収められた多数の文書を確認してみれば、外交官の類の名にも口偏が付けられ、よい意味の字にも口偏が付けら

れている。「啞哢哩」に口偏を使わず「依庇厘」と書いてあることもある。游の論もまた、結論を前提として、それに合う事実を探し求めた結果に過ぎないと言わざるを得ない。用字を見てそこに意味を見出そうとすることにどれだけの意味があるものか不明である。佐々木編(1967)に収められた1834(道光14)年の文書の1つにおいては「啞哢哩国」「英吉利国」「英吉利夷人」などの表記が混用されている。

清朝の外交資料をまとめた『籌弁夷務始末(道光朝)』(1856(咸豊6)年)⁸の巻頭の凡例に、“西洋の人名、地名にはしばしば口偏が付けられているが、夷酋の伯麦と義律の名は常に口偏を付けずに書かれている”という指摘がある。「伯麦」「義律」は英国海軍将校 James Bremer、Charles Elliot を表すと見られる。この2つの人名の扱いは、相手に対する待遇の差に関わっている可能性がある。しかし、もしそうだとすると、それは当の2人が例外的な扱いを受けているということであり、そこから口偏の付加が一般に蔑視を表すためのものであったと推論できるわけではない。

4.2 観察の不足

口偏蔑視表示説のほかの問題の1つは、それが特定の文脈における口偏の使用にのみ着目して論じられていることにある。すなわち、先に引用した論述(3.1)のそれぞれを確かめれば分かる通り、西洋の地名と人名の音訳だけ、それも、中国と西洋の関係が高度に緊迫した状態にあった19世紀中葉に始まる時期に中国人が使った音訳だけを見て判断を下している。そのような方法で考えれば、地名や人名の音訳に蔑視や敵意が込められているかのように思えてくるのも自然の成り行きである。

音訳語における口偏の機能を考えるには、上記のような限定を外して口偏の使用状況を広く観察しなければならない。そして、そのことに注意して確かめてみれば、西洋や西洋人に対する中国人の心理とは関わりのない文脈で使われている口偏の種々の事例を容易に見出せることが分かる。

口偏の付加は西洋人による著作中にも豊富に現れる。まず、よく知られた飲食物の名称について言えば、「咖啡」と「啤酒」はいずれも早くは19世紀前半に出版されたモリソンの辞書に見出される(黄編著(2020))。カレーの名称では、ロプシャイト『英華字典』に書かれた「咖哩」とクロフォード夫人の著した西洋料理の指南書『造洋飯書』に書かれた「噶喇」が口偏を使った早い例であり、いずれも1866(同治5)年の出版である(拙論(2020))。

無論、飲食物の名称にはとどまらない。西洋人によって書かれ、牛痘接種法を初めて中国に伝えた『啞哢哩国新出種痘奇書』(1805(嘉慶10)年)においては、書名にもある「啞哢哩」のほかに「啞^ア細^ア啞」「啞^ア啞^ア啞^カ」という地名に口偏が加えられているのみならず、編集者 James

⁸ この文献の存在は周(1998)を通じて知った。

Drummond、修訂者 Alexander Pearson、翻訳者 George Thomas Staunton の名がそれぞれ「哆啞咄」「噉啞」「嘶啞啞」と書かれている。ワクチンをマニラからマカオに運んだ商船 Esperanza 号 (希望号) の名は「啤啞啞啞船」と書かれており、最初の4字はマカオ商人 Pedro Huet の名であると見られる。

英国人宣教師ウィリアム・ミルン (William Milne、米憐) の出版した雑誌『察世俗毎月統記伝』(1815~1821 (嘉慶20~道光1)年)では、少数の地名に加えてキリスト教に関わる重要語の音訳が口偏の付いた字を使って書かれている。

^(ア-メン) 啞 啞 兩個字是以色^(イスラエル)耳以勒国^(イ)之話、訳言即我心^(イ)實願如此之意也。(「啞啞」の2字は古代イスラエルのことばで、訳せば“私はかくあることをまことに願う”という意味である。)

(「上古規矩」、『察世俗毎月統記伝』嘉慶丙子七月、1816 (嘉慶21)年)

ほかに休息日が「噉啞」——英語では Sabbath など——と書かれ、サタンが「噉啞」と書かれるなどしている。記事を筆記したのは中国人であろうが、宣教師の著述に協力した中国人がそれらの表記に蔑視を込めたとは考えられない。ちなみに、同誌において「耶穌^(イ)」「亜大夢^(イ)」などの人名と「巴比倫^(イ)」などの地名の音訳にはそれぞれ傍線、囲みの四角形が加えられているが、口偏を伴う「啞啞」「噉啞」「噉啞」などの音訳にはそのような装飾が施されていない。口偏があれば装飾は要らないと考えられたのであろう。⁹

マカオ生まれのポルトガル人ジョゼ・マルチーニョ・マルケス (José Martinho Marques、瑪吉士) による『新釈地理備考全書』(1847 (道光27)年)では音訳による外国地名に徹底して口偏が加えられ——後に触れる通り、例外もある——、例えば「啞啞啞^(ア)」「啞啞啞^(ア)」「啞啞啞^(ア)」「啞啞啞^(ア)」「啞啞啞^(ア)」「啞啞啞^(ア)」などの表記が使われている。

以上のような種々の事例における口偏の使用の意味を蔑視の観点から解釈できないことは明らかである。

王 (2013) によれば、英国人が自ら書いた中国語文書にも人名に口偏が加えられたものがあると言う。王は、筆者の把握の限りにおいて、従来口偏蔑視表示説に対する疑問を表明した唯一の著者であり、論文末で人名への口偏の付加の問題に触れて次のように述べている。このくだりに続けてモリソンの英華辞典の記述 (2 節) が引用されているが、ここでは省く。

如果真的是这样，我们便不能理解为什么英国人愿意接受、甚至也采用在名字上加上口字旁的做法——我们的确可以见到不少从英方送来，直接由英国人自己书写的中文文书里有这种加上口字旁的做法。其实，在当时英国人的理解里，这口字旁并不代表任何贬损或侮辱的成份，而是用来作为音译的标示。(もしほんとうに口偏が蔑視を表すのであれば、なぜ英国人がそのよう

⁹ 『察世俗毎月統記伝』に限らず、口偏を加えた音訳には傍線などの装飾が施されることが一般に少ないように思われる。ただし、ときに例外はあり、確実なことを言うにはより広範な調査を要する。

な表記を受け入れようと思ったのか、またさらには自ら人名に口偏を加えて書くことまでしたのか、理解できないことになる。実際、英国人が書いて送って来た少なからぬ中国語文書に口偏を加えた記法が見られるのである。実のところ、当時の英国人の理解において、この口偏は何ら蔑視や侮辱を表すものではなく、音訳を示すためのものであった。)

4.3 口偏付加の条件

口偏の機能を考えるには、その使用が音訳語に限られているという事実も考え合わせる必要がある。

もし口偏の付加によって蔑視を表せるのであれば、音訳語でない語に口偏が加えられることもあってよさそうなものである。ところが、「喫咭喇啞」「喫咭」「噉毛」「噉魄」のような表記の使用例を筆者は一例として見たことがない。また、中国人の書き手にとって蔑視や敵意の対象となる人物や地方はいつの世にあっても中国内部にも存在し得たはずである。ところが、中国語——漢民族の言語——の地名や人名に口偏が加えられた例も今のところ見出すことができていない。

このこともまた、口偏の付加がもっぱら音訳の表示を目的とするものであったことを強く示唆している。口偏が蔑視を表すという主張を説得力のあるものにするためには、なぜそれが音訳語に限られるのかという疑問に説明を与えることが必要である。

4.4 口偏付加と字義

最後に、口偏蔑視表示説にはほかに、「英吉利」のように意味上印象のよい字ばかりを使った音訳に口偏を加えて蔑視を表すものだろうかという疑問もある。

音訳語に蔑視や敵意を込めたければ、用字そのものを悪い意味のものに変えるほうが目的をはるかに効果的に達せられるはずである。実際、英国の国名の音訳は最初から「英吉利」であったわけではなく、早くは「英圭黎」「英鷄黎」「膺吃黎」などとも表記された。「英吉利」と同音¹⁰の音訳語を作る悪い意味の字を辞書で探してみれば、「英」には「塋」(墓)、「吉」には「飢」や「疾」、「利」には「痢」などの代替字がある。

印象のよい字だけを使った音訳を選んでおきながらそこに蔑視を表す口偏を加えるという行為は自己矛盾の要素を含んでいるようにも感じられる。もっとも、「英吉利夷官」「英吉利番船」のような表記の例もあるので(注5)、この点に関しては明確なことは言えない。

5 おわりに

音訳語における口偏の付加の現象について考え、口偏は単に音訳語をそれとして明示するものであり、当該の人や事物に対する蔑視を表すものではないことを述べた。

¹⁰ かりに普通話での発音に基づき、声調の違いは捨象して考える。

通常の漢字と異なる字を用いることで、人や事物が遠い世界のなじみの薄いものだという印象を読み手に与えることにはなり得る。そして、書き手がそうした効果を見込んで口偏を使うということもときにはあったかも知れない。しかし、そこから口偏が蔑視を表すものだという一般論に話を拡張することができるわけではない。

20世紀以後、地名や人名の音訳には口偏が使われなくなった。謝(2007)は、音訳が広東語ではなく官話の発音に基づいて行われるようになったことにその原因があるかのように言う。その論には発音と字形の混同があり、「啖咭喇」を「英吉利」に変えても発音が変わるわけではない。しかし、実際広東語には発音を示すために既存の漢字に口偏を加えて作り出した方言字が多い。李(2017)も、音訳に使われる口偏と広東語の関わりを論じている。確かに、音訳に口偏を使った文献は南方で出版されたものに多いという印象がある。事実の正確な理解のためには口偏使用の時間的、地域的分布を知りたいところであるが、いずれにせよ19世紀におけるその盛行が広東語の環境を本拠としていたことは確実のようである。

なお、ここでは音訳語の口偏の機能を一般的な見地から論じたが、その具体的な使用、不使用の根拠については別途考察を要する。例えば、口偏の使用が地名や人名では廃れ、食品名その他には残ったのはなぜかという疑問に対して、今結果論の域を超える解釈を与えることはむずかしい。また、外国地名でも、アジアの地名には口偏が加えられないものがあつた。ルソン島を表す「呂宋」を「啞味」と書いた事例を筆者は見たことがなく、もしあるとしてもごくまれのはずである。音訳語にほぼ一貫して口偏を加えているマルケスの『新釈地理備考全書』でも、アジアの国名には口偏を欠くものがいくつもあり、例えば「西藏」「琉球」「印度」「暹羅」「阿付干」はそのように書かれている。また、同一の文献における西洋の人名の表記においても、人物によって口偏を加えたり加えなかったりすることがあることは『籌弁夷務始末(道光朝)』の凡例の記述にもあつた(4.1)。緩く言えば、なじみの深い地名、人名には口偏があまり使われなかったということかとも思われるが、正確な理解のためにはしかるべき調査が必要である。

文献

- 伊能嘉矩(1928)『台湾文化志』中巻(刀江書院)
- 衛藤瀋吉(1982)「序章 中国政治における波動リズム」衛藤瀋吉編『現代中国政治の構造』(日本国際問題研究所)
- 衛藤瀋吉(1984)「世界の中の明治日本—韓相—教授の著者を勧めるの文—」韓相一(李健・滝沢誠訳)『日韓近代史の空間』(日本経済評論社)
- 後藤朝太郎(1935)『支那風土記』(章華社)

- 後藤朝太郎 (1938) 『面白い国・支那』(高陽書院)
- 佐々木正哉編 (1967) 『鴉片戦争前中英交渉文書』(巖南堂書店)
- 白川静 (1978) 『漢字百話』(中央公論社)
- 武田泰淳^{たいじゆん} (1971) 「武田泰淳対談 同文同種というけれど 〈ゲスト〉陳舜臣」『文芸春秋』昭和46年8月号
- 田野村忠温 (2019) 「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—流音の知覚と表記—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第59巻
- 田野村忠温 (2020) 「カレーを表す中国語名称の変遷」『或問』第38号
- 田野村忠温 (2021) 「音訳語『珈琲』の歴史」『阪大日本語研究』33 (大阪大学大学院文学研究科日本語学講座)
- 宮崎市定 (1971) 『中国文明選 第11巻 政治論集』(朝日新聞社)
- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』(宝文館)
- 方维规 (2012) 「“夷”、“洋”、“西”、“外”及其相关观念: 晚清译词从“夷人”到“外国人”的转换」郎宓樹・阿梅龙・顾有信编著、赵兴胜等译『新词语新概念: 西学译介与晚清汉语词汇之变迁』(山东画报出版社)
- 冯天瑜 (2004) 『新语探源——中西日文化互动与近代汉字术语生成』(中华书局)
- 葛綏成編 (1940) 『最新中外地名辭典』(中華書局)
- 黄河清编著 (2020) 『近现代汉语辞源』(上海辞书出版社)
- 焦国标 (2000) 「音译词的意译成分」『人民日报 (海外版)』2000年10月9日
- 李洁 (2017) 「明清西语专名汉译中特用汉字的“造”和“用”」『学习贯彻党的十九大精神 推进“五个现代化天津”建设——天津市社会科学界第十三届学术年会优秀论文集 (上)』(天津人民出版社)
- 孙伯君 (2010) 『西夏新译佛经陀罗尼的对音研究』(中国社会科学出版社)
- 孙伯君 (2020) 「“华夷译语”汉字注音法考源」『北方民族大学学报 (哲学社会科学版)』2020年第2期
- 王宏志 (2013) 「律劳卑与无比人名翻译与近代中英外交纷争」『中国翻译』2013年第5期 (中国翻译工作者协会)
- 谢贵安 (2007) 「从英法德意俄美汉译国名演变看中国人对西方列强的认知过程」冯天瑜・刘建辉・聂长顺主编『语义的文化变迁』(武汉大学出版社)
- 许威汉 (1992) 『汉语词汇学引论』(商务印书馆)
- 游光明 (2014) 「《林则徐公牍》中音译词的类型、特点及价值」『淮南师范学院学报』2014年第6期
- 中山大學歴史系・中國近代現代教研組研究室編 (1963) 『林則徐集 公牘』(中華書局)
- 周振鹤 (1998) 『逸言殊语』(浙江摄影出版社)
- 邹振环 (2007) 『西方传教士与晚清西史东渐——以 1815 至 1900 年西方历史译著的传播与影响为中心』(上海古籍出版社)